斎藤緑雨

内田魯庵

青空文庫

「僕は、本月本日^を以て目出たく死去^{つかまつり}仕候」という死亡の自家広告を出したのは齋藤^{さいとうりよくう}緑雨^{りよくう}が一生のお別れの皮肉というよりも江戸ツ子作者の最後のシャレの吐きじまいをしたので、化政度戯作文学のラスト・スパークである。緑雨以後真の江戸ツ子文学は絶えてしまった。

紅葉も江戸ツ子作者の流れを汲^くんだが、紅葉は平民の子であっても山の手の士族町に育つて大学の空気を吸った。緑雨は士族の家^{したまち}に生れたが、下町^{したまち}に育つて江戸の気分にヨリ多く浸っていた。緑雨の最後の死亡自家広告は三馬^{さんば}や一九^{いっく}やその他の江戸作者の死生を茶にした辞世と共通する江戸ツ子作者特有のシャレであって、

緑雨は死の瞬間までもイイ気持になって江戸の戯作者の浮世三分五厘の人生観を歌っていたのだ。

この緑雨の死亡自家広告と旅順の軍神広瀬中佐の海軍葬広告と相隣りしていたというのはその後聞いた咄であるが、これこそ真に何たる偶然の皮肉であろう。緑雨は恐らく最後のシヤレの吐き栄えをしたのを満足して、眼と唇辺に会心の「Sneer」を泛べて苔下にニヤリと脂下ったろう。「死んでまでも『今なるぞ』節の英雄と同列したるは歌曲を生命とする緑雨一代の面目に候」とでも冥土から端書が来る処だった。

緑雨の眼と唇辺に泛べる「Sneer」の表情は天下一品であつた。能く見ると余り好い男振ではなかつたが、この「Sneer」

が髯ひげのない 細ほそ面おもてに漲みなぎると俄にわかに活いき活いきと引立ひつて来て、人よつ由よつては小憎こぞらしくも思きい、氣障きざにも見みえたるうが、緑雨きりごの千両せんりやうは實じつにこの『Sneer』でああつた。ドチラかといいうと寡言くわげんの方かたで、眼まなこと唇くちびる辺へに冷ひややかな微笑わいごうを寄よせつつ黙もくして人の饒おし舌やべりを聞きき、時々ときとき低おちつい沈しづ着ちいた透すきとお徹とくるようような声こゑでプツリと止とどめを刺さすようような警けい句ごを吐ついてはニヤリと笑わらつた。

緑雨きりごの随筆ずいひつ、例れいえ**ば**『おぼえ帳ちやう』といいうようような物ものを見みると、警けい句ごの連発れんぱつに一い々い々い感服かんぷくするに違いとまあらずだが、緑雨きりごと話わしていると、ここういいう警けい句ごが得意とくいの『Sneer』と共ともここししばしば突発とつぱつした。我々われら鈍漢どんかんが千言万言せんげんばんげん列ならべても要領やうりやうを尽つせない事ことを緑雨きりごはただ一言いちげんで窮きゆう処ところに命いのち中ちゆうするようような警けい句ごを吐ついた。警けい句ごは天才てんさいの最さいも得意とくいとする

武器であつて、オスカー・ワイルドもメーターランクも人気の半ばは警句の力である。蘇峰そほうも漱石も芥川龍之介も頗るすこぶ巧妙な警句の製造家である。が、緑雨のスツキリした骨と皮の身体からだつき、ギロリとした眼つき、絶間たえまない唇辺くちもとの薄笑い、惣すべてが警句に調和していた。何の事はない、緑雨の風ふう 丰ほう、人品、音声、表情など一切がメスのように鋭どいキビキビした緑雨の警句そのままの具象化であつた。

私が緑雨を知つたのは明治二十三年の夏、或る温泉地に遊んでいた時、突然緑雨から手紙を請取つたのが初めてであつた。尤もその頃専らもっぱ称していた正直正太夫の名は二十二年ごろ緑雨が初めてその名で発表した「小説八宗はっしゅう」以来知つていた。(この

「小説八宗」は『あまがえる雨蛙』の巻尾に載つておる。それ故、こ

の皮肉を売物にしている男がドンナ手紙をくれたかと思つて、急いで開封して見ると存外改たまつた妙に取濟ました文句で一向無つ味まらなかつた。が、その末にこの頃は談林だんりんほつく発句とやらが流行するから自分も一つ作つて見たといつて、「月落烏啼霜滿天寒かなさ哉

——息を切らずに御読下し被くだされたく下度候」と書いてあつた。当時は

正岡子規がマダ学生で世間に顔出しせず、紅葉あわしまかんげつが淡島寒月に

かぶれて「稻妻や二尺八寸ソリヤこそ抜いた」というような字余

りの談林風を吹かして世間を煙けむに巻いていた時代であつた。この

時代を離れては緑雨のこの句の興味はないが、月落ち烏啼からすないての

調子は巧みに当時の新らしい俳風を罵倒したもので、殊ことに「息を

切らずに御読下し被下度候」は談林の病処を衝いた痛快極まる冷罵であつた。

緑雨が初めて私の下宿を尋ねて来たのはその年の初冬であつた。当時は緑雨というよりは正直正太夫であつた。私の頭に深く印象しているは「小説八宗」であつて、驚くべき奇才であるとは認めていたが、正直正太夫という名からして寄席芸人じみていて何という理由もなしに当時売出しの落語家の今輔いますけと花山文かざぶんと一緒にしたような男だろうと想像していた。尤もこういう風采ふうさいの男だとは多少噂うわさを聞いていたが、会わない以前は通人つうじん気取りの扇をパチつかせながらヘタヤタラとシヤレをいう気障きざな男だろうと思つていた。ところが或る朝、突然刺しを通じたので会つて見ると、

斜子ななこの黒の紋付きに白ツぽい一いち樂らくのゾロリとした背の高いスツ
 キリした下した町まちの若檀わかだんな那風なの男で、想像したほど忌味いやみがなかつ
 た。キチンと四角に坐つたまま少しも膝ひざをくずさないで、少し反そ
 身りみに煙草たばこを燻ふかしながらニヤリニヤリして、余り口くちか数かずを利きかず
 にジロジロ部屋へやの周囲まわりを見廻まわしていた。どんな話をしたか忘れて
 しまったが、左とに右かく初めて来たのであるが、朝の九時ごろから
 夕方近くまで話して帰つた。その間少しも姿勢をくずさないでキ
 チンとしていた。一体行儀の好い男で、あぐらを掻かくツてな事は
 殆んどなかつた。いよいよ坐り草臥くたびれると能よく立たて膝ひざをした。
 あぐらをかくのは田舎者である、通人的でないと思つていたので
 ろう。

それが皮切かわきりで、それから三日目、四日目、時としては続いて
毎日来た。来れば必ず朝から晩まで話し込んでいた。が、取留とりとめ
た格別はなしな咄もそれほどはなしの用事も無いのにどうしてこう頻ひんぱん繁ばんに来
るのか実は解らなかつたが、一と月ばかり経ってから漸やっと用事が
解つた。その頃村山龍平の『国会新聞』てのがあつて、幸田
露伴と石橋忍月いしばしにんげつとが文芸部を担任していたが、仔細しさいあつて忍
月が退社するので、（あるいは既に退社していたのか、ドツチだ
か忘れてしまつたが、）その後任として私を物色して、村山の内
意を受けて私の人物見届け役に来たのだそうだ。その時分緑雨は
『国会新聞』の客員という資格で、村山の秘書というような関係
であつたらしく、『国会新聞』の機微に通じていて、編輯部内の

内情やら村山の人物、新聞の経営方針などを来る度毎たんびに精くわしく話して聞かせた。こつちから訊ききもしないのに何故なぜこんな内幕うちまくばなを咄しをするのか解らなかつたが、一と月ばかり経つて公然入社こつぱんの交渉を受けた時初めて思い当つた。この交渉は相互の事情でそれぎりとなつたが、緑雨と私との関係はそれが縁となつて一時はかなり深く交際した。

尤も私は飲んだり喰つたりして遊ぶ事が以前から嫌いだったから、緑雨に限らず誰との交際にも自ずから限度があつたが、当時緑雨は『国会新聞』廃刊後は定きまつた用事のない人だったし、私もまた始終ブラブラしていたから、懶惰らんたという事がお互いの共通点となつて、私の方からは遠い本ほんじよ所じよくんだりほんじよに余り足が向かなか

つたが、緑雨は度々やって来た。来れば必ず一日遊んでいた。時としては朝早くから私の寝込ねこみを襲ねうて午飯ひるめしも晩飯も下宿屋の不ま味ずいものを喰くつて夜る十一時十二時近くまで話し込んだ事もあつた。

その時分即ち本所時代の緑雨はなかなか紳士であつた。貧乏咄なきごとをして小遣こづかいせん銭せんにも困なるような泣な言ごとを能なくいつていても、いつでもゾロリとした常綺羅じょうきらで、困なつてるような気振けぶりは少しもなかつた。が、家を尋ねると、藤堂伯爵とうどうの小さな長屋やっかいに親やっかいの厄介やくかいとなつてる部屋住へやずみで、自分の書齋しよらしい室むろさえもなかつた。緑雨のお父さんというは今の藤堂伯とうどうの先々代せんぜんだいで絢堯齋けんぎようさいの名なで通とつてる殿様てんやうの准侍医じゆんじゐであつた。この絢堯齋けんぎようさいというは文雅風流ぶんがふうりゆうを以もつて

聞えた著名なだの殿様であつたが、頗すこぶる頑固がんこな旧弊人で、洋医の薬が大嫌いで毎日持薬に漢方薬を用いていた。この煎薬せんやくを調進するのが緑雨のお父さんの役目で、そのための薬味筆筒やくみだんすが自宅に備えてあつた。その薬味筆筒を置いた六畳敷ばかりの部屋が座敷をも兼帯していて緑雨の客もこの座敷へ通し、外きまに定つた書齋らしい室がなかつたようだ。こんな長屋に親の厄介となつていたのでから無論気楽な身の上ではなかつたろうが、外で出ける時はイツデモ常綺羅の斜子の紋付に一楽の小袖というゾロリとした服装なりをしていた。尤も一枚こつきりのいわゆる常上じょうじょうぎ着はれぎの晴着なしであつたろうが、左とに右かくりユウとした服装なりで、看板かんばん法被はつぴに篆書崩てんしよくずしの齊せいの字の付いたお抱かかえ然かかたる俵くろまを乗のり廻まわし、何処どこへ行つても

必ず俵を待たして置いた。例えば私の下宿に一日遊んでる時でも、朝から夜る遅くまでも俵を待たして置いた。長尻ながつちりの男だから、ドコへ行つても長かつたが、何処でも俵を待たして置いたから、緑雨の来ているのは伴待ともまちや玄関や勝手に長々と臥ねそべつてる緑雨の車夫で直ぐ解つた。緑雨の車夫は恐らく主人を乗せて駈かける時間よりも待つてて眠る時間の方が長かつたろう。緑雨は口先きばかりでなくて眞実困つていたらしいが、こんな馬鹿げた虚飾みえを張るに骨を折つていた。緑雨と一緒に歩いた事も度々あつたが、緑雨は何時いつでもリユウとした黒紋付で跡から俵がお伴をして来るといふ勢いきほいだから、精々せいせいが米よねり琉ゆうの羽織てつわくに鉄欄てつわくの眼鏡の風采あが頗る揚あがらぬ私の如きはどうしてもお伴の書生ぐらいにしか見え

なかつたであらう。

緑雨が一日私の下宿で暮す時は下宿の不味いお膳を平気で喰べていた。シカモ鰯いなだの味噌煮というような下宿屋料理を小言云い云い奇麗に平らげた。が、率いざ何処かへ何か食べに行こうとなるとなかなか厳やかましい事をいった。三日に揚いげずに来るのに毎い次でも下宿の不味いものでもあるまいと、何処かへ食いべに行かないかと誘いうと、鳥は浜はま町の筑紫つくしでなけりやア喰いえんの、天麩羅は横よこやまちようまるしん

山町の丸新まるしんでなけりやア駄目だのだと、ツイ近所きんじよで間に合あわすという事が出来なかつた。家の惣菜そうざいなら不味くても好よいが、余所よそへ喰いべに行くのは贅ぜい沢たくだから選え択くみをするのが当然であるといふのが緑雨の食く物いもの哲学であつた。その頃は電車のなかつ

た時代だから、緑雨はお抱えの俵が毎次でも待つてるから宜いとして、こつちはわざわざ高い宿やどぐるま俵たねで遠方まで出掛けるのは無駄だと思つて、近所の安西洋料理にでも伴つれて行こうもんなら何となく通人の権威を傷つけられたというような顔をした。「通人てものは旨うまい物ばかり知つていて不味い物が解らんようでは駄目だ」と、或時近所の、今なら七錢均一とか十錢均一とかいいそ
 うな安西洋料理へ案内した時にいうと、「だから君の下宿のお膳を一生懸命研究しているじゃアないか、」と抜からぬ顔をして冷すましていた。それでも西洋料理は別格通でなかつたと見えて、一向通もいわずに塩の辛い不味い料理を奇麗に片附けた。ドダイ西洋料理を旨うまがる田舎漢いなかものでは食物くいものの咄はなしは出来ないというのが緑

雨の食通であつたらしかつた。

本所を引払つて、高等学校の先きの庭の広いので有名な奥井と
 いう下宿屋の離れに転居した頃までは緑雨はマダ紳士の格式を落
 さないで相当な贅をいつていた。丁度上田^{うへだ}万年^{かずとし}博士が帰朝した
 てで、飛白^{かすり}の羽織に鳥打帽^{とりうちぼう}という書生風で度々遊びに来ていた。
 緑雨は相応に影では悪語^{わるくち}をいつていたが、それでも新帰朝の秀
 才を竹馬の友としているのが万更^{まんざら}悪い気持がしなかつたと見え
 て、咄のついでに能く万年がこういつたとか、あアいつたとか噂
 をしていた。

壱岐殿坂の中途を左へ真砂町^{まさごちよう}へ上るダラダラ坂を登り切つた
 左側の路次裏の何とかいう下宿へ移つてから緑雨は俄^{にわか}に落魄^{おちぶ}れた。

落魄れたといつては語弊があるが、それまでは緑雨は貧乏咄をし
ても黒斜子の羽織を着ていた。不味い下宿屋の飯を喰つていても
牛肉屋の鍋なべを突つつくような鄙さもしい所まね為は紳士の体面上すまじきも
のきのような顔をしていた。が、壱岐殿坂時代となると飛白の羽織
を着初きだして、牛肉屋の鍋でも下宿屋の飯よりは旨うまいなどと弱音よわねを
吹き初だした。今は天麩羅屋か何かになつてゐるが、その頃は「いろ
は」といつた坂の曲り角の安汁粉屋しるこやの団子だんごを藤村ふじむらぐらゐに喰え
るなぞといつて、行きたんびに必ず団子まるを買つて出した。

壱岐殿坂時代の緑雨には紳士風が全まるでなくなつてスツカリ書生
風となつてしまつた。竹馬の友の万年博士は一躍専門学務局長と
いう勅任官に跳はねあが上あがつて肩で風を切る勢いであつたから、公務も

忙がしかつたらうが、二人の間に何か衝突もあつたらしく、緑雨の汚ない下宿屋には万年博士の姿が余り見えなかつた。何かにつけて緑雨は万年博士を罵つて、愚図愚図いやア万年泣拝という手紙を何本も発表してやると力んでいた。その代りに当時はマダ大學生であつた佐々 醒 雪、笹川臨風、田岡嶺雲というよくな面々がしばしば緑雨のお客さんとなつて「いろは」の団子を賞 翫した。醒雪はその時分々たる黒い髯を垂れて大學生とは思われない風采であつた。緑雨は佐々 弾 正と呼んで、「昨日弾正が来たよ、」などと能くいつたもんだ。緑雨の『おぼえ帳』に、「鮪の土手の夕あらし」という文句が解らなくて「天下豈鮪を以て築きたる土手あらんや」と力んだという批評家は誰

だか忘れたがこの連中の一人であった。緑雨は笑止しがって私に話したが、とうとう『おぼえ帳』の一節となった。

上田博士が帰朝してから大学は俄に純文学を振って『帝国文学』を発刊したり近松研究会を創めたりした。緑雨は竹馬の友の万年博士を初め若い文学士や学生などと頻りに交際していたが、江戸の通人を任ずる緑雨の眼からは田舎出の学士の何にも知らないのが馬鹿げて見えたのは無理もなかった。若い学士の方でも緑雨の社会通を相当に認めて、そういう方面の解らない事があるとしばしば緑雨の許に訊きに来たもんだ。万年博士が『天網島』を持って来て、「さんじやうばつからうんころとつころ」とは何の事だと質問した時は、有繫の緑雨も閉口して兜を抜いで降参した。

その頃の若い学士たちの馬鹿々々しい質問やかくやおち楽屋落やないしよばな内緒しの剔すっぱぬ抉ききが後の『おぼえ帳』や『控え帳』の材料となつたのだ。

何でもその時分だった。『帝国文学』を課題とした川柳をイクトもなら陳べた端書なを續いて三枚も四枚もよこした事があつた。端書だからツイ失なくしてしまつて今では一枚しか残つていないが、

「上田の附つけ文ぶみ標準語に当惑し」、先生の原稿だぞと委員云ひ「というようなのがあつた。前者は万年博士が標準語に関する大論文を発表した際で、標準語という言葉がその頃の我々の仲間の流行語となつていた。また誰かの論文中「Chopin」をチヨピンと書いてあつたので、「チヨピンとはおれが事かとシヨパン云ひ」と

いう川柳が出来たが、この作者は緑雨であつたか万年博士であつたか忘れてしまった。『門三味線かどじやみせん』を作つたのもこの壺岐殿坂時代であつて、この文句が今の批評家さまに解つたら一大事だなどと皮肉をいいつつ会心の文句を読んで聞かした事があつた。

森川町の草津の湯の傍の簾藤すじょうという下宿屋に転じたのはその後であつた。この簾藤時代が緑雨の最後の文人的生活であつた。(小田原時代や柳原時代は文壇とはよほど縁が遠くなつていた。) 緑雨が一葉の家へしげしげ出入でいりし初めたのはこの時代であつて、同じ下宿に燻くすぶつていた大野洒竹おおのしやちくの関係から馬場孤蝶ばばこちよう、戸川秋骨あきこつというような『文学界』連と交際を初めたのが一葉の家へ出入する機会となつたのであろう。その頃から私とは段々疎遠と

なつて余り往来しなくなつたゆえ、その頃からの緑雨の晩年期についてほとは殆んど何にも知らない。

余りはばか憚りなくいうと自然暗黒面を暴露するようになるが、緑雨は虚飾家といへば虚飾家だが黒斜子の紋附きを着て抱え俵を乗廻げすしていた時代は貧乏咄まねをしていても氣品を重んじていた。下司げすな所為は決して倣しなかつた。何処どこの家の物でなければ喰えないなどと贅をいつていた代りには通人を氣取ると同時に紳士を任じていた。

奥井から壱岐殿坂へ移つて、紳士風が抜けて書生風となつてからもやはり相当に見識を取つていて、時とき偶たまは鄙さもしい事を口にしても決して行ふ事はなかつた。かつ中学へ通う小さい弟（今は医

学士となつてゐる）と一緒に暮してゐたから自然謹慎してゐた。

緑雨の耽溺^{たんでき}方面の消息は余り知らぬから、あるいはその頃から

案外コソコソ遊んでいたかも知れないが、左^とに右^かく表面は頗る真^ま

面目^{じめ}で、目に立つような遊びは一切慎しみ、若い人たちのタワイ

もない遊びぶりを鼻^{はなのさき}頭^{せせらわら}で冷^{うち}笑^{うち}つてゐた。或る楼^{うち}へ遊びに

行つたら、正太夫という人が度々遊びに来る、今晚も来ています

というゆえ、その正太夫という人を是非見せてくれと頼んで、廊^ろ

下^{うか}鳶^{とんび}をして障子^{すき}の隙^{そつ}から窺^{のぞ}いて見たら、デクデク肥^{ふと}つた男

が三枚も蒲団^{ふとん}を重ねて木魚^{もくぎよぜん}然^{あぐら}と安座^{あぐら}をかいて納まり返つてゐた

と笑つてゐた。また或る人たちが下司^かな河岸^か遊びをしたり、或る

人が三^みツ蒲団^{ふとん}の上で新聞小説を書いて得意になつて相^{あい}方^{かた}の女に

読んで聞かせたり、また或る大家が吉原は何となく不潔なような気がするといいつつも折々それとなく誘いの謎なぞを掛けたり、また或る有名な大家が細君さいくんにでもやるような手紙を女郎によこしたのを女郎が得意になってお客に見せびらかしてるといふような話をして、いわゆる大家先生たちも遊びに掛けると存外な野暮やぼで、田舎臭くて垢ぬけあかがしないと嘲あざけっていた。それから比べると、文壇では大家ではないが、或る新聞小説家が吉原へ行つても女郎屋へ行かずに引手茶屋ひきてぢやへ上つて、十二、三の女の子を集めてお手玉をしたり毬まりをついたりして無邪気な遊びをして帰るを眞の通人だと称揚していた。少くも緑雨は遊ぶ事は遊んでもこの通人と同じ程度の遊びだと暗におに匂わして他の文人の二等遊びを冷笑していた。

壹岐殿坂時代の緑雨はまだこういう垢抜けした通人的気品を重んずる風が残っていた。

すどう簾藤へ転じてからこの気風が全まるて変ってしまった。服装なりも書生

風よりはむしろ破落戸ごろつき——というと語弊があるが、同じ書生風で

も墮落書生というような気味合があつた。第一、話題が以前より

はよほど低くなつた。物質上にも次第ひつぱくに逼迫ひつぱくして来たからであ

ろうが、自暴自棄の気味で夜よどまり泊よどまりが激しくなつた。昔しの緑雨な

ら冷笑しそうな下等な遊びに盛んに耽ふけつたもので、「こんな遊び

をするようでは緑雨も駄目です、近々看板を卸してしまひます、」

と下等な遊びを自白して淋しそうに笑つた事があつた。その頃緑

雨の艶聞がしばしば噂された。以前の緑雨なら艶聞の伝わる人を

冷笑して、あの先生もとうとう恋の奴やつこしとなりました、などと澄ました顔をしたもんだが、その頃の緑雨は安価な艶聞を得意らしく自分から臭わす事さえあつた。

小田原へ引越してから一度上京したついでに尋ねてくれた。生憎いにく留守で会わなかつたので、手紙を送ると直ぐ遣よこしたのが次の手紙で、それぎり往復は絶えてしまった。緑雨の手紙は大抵散逸したが、不思議にこの一本だけが残つてるから爰こゝに掲げて緑雨を偲しのぶたねとしよう。

言文一致ニカギル、コウ思附イタ上ハ、基礎ヤ標準ヤ二頓とんじ
 着やくスルマデモアリマセヌ、タダヤタラニオハナシ体ヲ振廻

シサエスレバ、ドコカラカ開化ガ参リマスソウデ、私モマケ
 ズニ言文一致デコノ手紙ヲシタタメテ差上ゲマス、今二三輪^{みわ}
 田^た君ノ梅見ニ誘ウ文、高津君ノ悔ミノ文ナドヲ凌^{りょうが}駕スルコ
 トト思^{おぼしめ}召シ下サイ

久シクオ目ニカカリマセヌガ、コレハアナタニバカリデナク、
 ドナタニモ同ジコトデ、先日チヨツト露伴君ヲタズネマシタ
 ノサエ二年ブリト申スヨウナ訳デス、昔ハ御機嫌伺イトイウ
 事モアリマシタガ、今デハ御氣焰^{ごきえん}伺イデスカラ、蛙鳴ク小田
 原ツ子ノ如キハ、メツタニ都へハ出ラレマセヌ、コノゴロ御
 引越ニナリマシタソウデ、区名カラ申シマスト、アナタモヤ
 ハリ牛門ノ一傑デアラセラルルヨウナ事デ、先ゴロ弟ヲ喪^{うしな}イ

マシタノデ、イロイロ片附ケモノヲ致シマシタ、即チ財政整理デ、ソノ節『我樂多文庫』ヲ見出シマシタカラ、遅^{おそ}マキナガラ返上ニ及ビマシタノデ、仰セノ通りアノ時分ノコトヲオモイマス、何ダカオカシクナリマス

病氣ヲオタズネ下サイマシタガ、コレハ重イトイエバ重イ、軽イトイエバ軽イ、ドチラニモナリマスノデ、カノ本復スルカト思エバ全快スノ方ノ組^くデス、当所へ参リマス前、凡^おソ半年ホドヲ鵜^{くげぬま}沼^{ぬま}ニ辛棒シテオリマシタガ、無論ドツトネテイルトイウデハアリマセズ、ソレガカエツテ苦痛デハアリマシガ、昨今デハマズマズ健康ニチカイ方デス

文壇モ随分妙ナモノニナツタデハアリマセヌカ、才人ゾロイ

デ、豪傑ゾロイデ、イヤハヤ我々枯稿連ハ口ヲ出ス場所サエ
アリマセヌ、一ツ奮ツテナドト思ウコトノナイデモアリマセ
ヌガ、何分オソロシサガ先ニ立チマスノデ、ツイツイ遠クカ
ラ拝見シテイルトイウヨウナコトデ、コレデ無難ニ飯ガクエ
レバ、コンナラクナ事ハアリマセヌ、慾ニハ私モ東京ニイテ、
文芸倶楽部ノ末ノ方ニアルヨウナ端唄はうたヲツクツテ、竹富久井
アタリニ集会シテイマシタラ、モウ一倍ラクナ事ダロウト思
イマス

近ゴロノ私ノ道楽ハ、何デモオモイ浮うかンダコトヲ書かきツケテオ
イテ、ソレガドレダケノ月日ヲ経タラ、フルクナルカト申ス
コトヲ試験シテオリマス、何ヲ才隠シ申シマシヨウ私モ華族

ノ二男ニハ生レマセヌノデ、白米氏ニ敗ラルル点ニオイテハ御同様デス

何カ書クコトガモツトアツタツモリデシタガ、丁度妹ノモトカラ電報ガ今届キマシテ、急ニ出立ノヨウイニカカリマスノデ、コノ辺デヤメテ置キマス、シリキリトンボ。乱筆御用捨

三十日

齋藤

内田様

コウ書イタママデ電車ニ飛乗りマシタノデ、今日マデ机ノ上ニ逗とうりゆう留シテオリマシタ、昨夜帰宅イタシマシタバカリデ今マタ東京ヘ立ちマスノデ書直スヒマガアリマセヌ、ナゼソ
ンナニアワテルカト才思召シマシヨウガ、ソレハ明後日アタ

リノ新聞広告ニ出マス件ト、妹ノ方ノ件ト二ツノ急要ガアル
 タメデス、オユルシ下サイ
 五日正午

緑雨の失意の悶々もんもんがこの冷静を粧よそおった手紙の文面にもありあり現われておる。それから以後は全く疎縁になつてしまつた。

その後再び東京へ転住したと聞いて、一度人伝ひとづつてに聞いた浅草あさくの七曲ななまがりの住居すまいを最寄もよりへ行つたついでに尋ねたが、ドウしても解らなかつた。誰かに精しく訊きいてから出直すつもりでいると、その中に一と月ほど経つて、「小生事本日死去仕候」となつた。一代の奇才は死の瞬間までも世間を茶にする用意を失わなかつたが、一人の友人の見舞うものもない終焉しゆうえんは極めて淋しか

った。それほど病気が重くなつてるとは知らなかつたので、最^も一度尋ねるつもりでツイそれなりに最後の皮肉を訊かずにしまったのを今なお残^{のこりお}惜しく思っている。葬儀は遺言だそうで営まなかつたが、緑雨の一番古い友達^{のよきさかぶん}の野崎左文と一番新しい親友の馬場孤蝶との肝煎^{きもいり}で、駒込^{こまごめ}の菩提所^{ぼだいしよ}で告別式を行つた。緑雨の竹馬の友たる上田博士も緑雨の第一の知己なる坪内博士も参列し、緑雨の最も莫^{ばくげき}逆を許した幸田露伴が最も悲痛なる祭文を読んだ。丁度風交りの雨がドシャドシャ降つた日で、一代の皮肉家緑雨を弔うには極めて相応^{ふさわ}しい意地の悪い天気であつた。

緑雨の全盛期は『国会新聞』時代で、それから次第に不如意となり、わざわざ世に背^{そむ}き人に逆らうを売物としたので益々世間か

ら遠ざかるようになった。元来緑雨の皮肉には憎にく気がなくて愛あい嬌ようがあつた。緑雨に冷笑されて緑雨を憎む気には決してなれなかつた。が、世間から款待もてはやさされて非常な大文豪であるかのよう
に持上げられて自分を高く買うようになってからの緑雨の皮肉は
冴さえを失つて、或時は田舎のお大尽のように横柄おうへいで鼻持はなもちがなら
なかつたり、或時は女に振棄ふりすてられた色男のように愚痴いツぽく厭いや
味やみであつたりした。緑雨が世間からも重く見られず、自らも世間
の毀誉褒貶きよほうへんに頓着しなかつた頃は宜よかつたが、段々重く見られて
自分でも高く買うようになると自負と評判とに相応する創作なり
批評なりを書かねばならなくなるから、苦しくもなり固くもなつ
た。同時に自分を案外安く扱う世間の声が耳に入ると不愉快で堪たま

らなくなつて愚痴を覆すこぼようになった。緑雨の愚痴は壹岐殿坂時代から初まつたが、それ以後失意となればなるほど世間の影かげぐち口くちに対する弁明即ち愚痴がいよいよ多くなつた。私が緑雨と次第に疎遠になつたのは緑雨の話柄が段々低級になつて嫌いやぎ気がさしたからであるが、一つは皮肉の冴を失つた愚痴を聞くのが気の毒で堪らなかつたからだ。

緑雨は逍遥や鷗外と結んで新らしい流れに棹さおさしていた。が、根が昔の戯作者系統であつたから、人生問題や社会問題を文人には無用な野暮臭い穿せん鑿さくと思つていた。露骨にいうと、こういうマジメな問題に興味を持つだけの根柢を持たなかつた。が、不思議に新らしい傾向を直覚する明敏な頭を持っていて、魯文門下ろぶんの

「江東みどり」から「正直正太夫」となると忽ちたちま逍遙博士と交を訂し、続いて露伴、鷗外、万年、醒雪、臨風、嶺雲れいうん、洒竹、一葉、孤蝶、秋骨と、絶えず向上して若い新らしい知識に接触するに少しも油断がなかつた。根柢ある学問はなかつたが、不断の新傾向の聡明そうめいなる理解者であつた。が、この学問という点が緑雨の弱点であつて、新知識を振廻すものがあると痛く癢ひとしやくさわに触るらしく、独逸語や拉丁語ラテンを知つていたつて端唄の文句は解るまいと空そく、らうそぶ嘯かたきいて、「君、和田平の鰻うなぎを食つた事があるかい？」などと敵を討つたもんだ。

緑雨の傑作は何といつても『油地獄あぶらじごく』であろう。が、緑雨自身は『油地獄』を褒めるような批評家さまだからカタキシお話し

にならぬといつて、『かくれんぼ』や『門三味線』を得意がつていた。『門三味線』は全く油汗を搾しぼつて苦辛くしんした真に彫心鏤骨るこつの名文章であつた。けれども苦辛というは修辞一点張であつたゆえ、私の如きは初めから少しも感服しないで明らさまに面白くないといふと、頗すこぶる不平で、「君も少し端唄の稽古けいこでもし玉え、」と面白くない顔をした。緑雨のデリケートな江戸趣味からは言文一致の翻譯調子の新文体の或るものは気障きざであつたり、或るものは田舎臭しんげかつたりして堪らなかつたようだ。

が、緑雨の傑作はやはり『油地獄』と『雨蛙』であろう。この二つはいずれも緑雨自身の不得意とする作で、人の褒めるのが癪さかに触るといつて喰つて掛つたものであるが、緑雨が自ら得意とす

る『かくれんぼ』や『門三味線』よりは確たしかに永遠の生命がある。聡明な眼識を持つていたがやはり江戸作者の系統を引いてシヤレや小唄の粹を拾つて練りに練り上げた文章上の「穿うがち」を得意とし、世間に通用しない「独ひとりよがり」が世間に認められないのを不満としつつも、誰にも理解されないのをかえつて得意がる気味があつた。が、紅葉も露伴も飽かれた今日、緑雨だけが相変らず読まれて、昨年縮印された全集がかなりな部数を買つたというは緑雨の随喜者が今でもマダ絶えないものと見える。緑雨は定めし苔こけの下でニヤリニヤリと脂やにさ下つてるだろう。だが、江戸の作者の伝統を引いた最後の一人たる緑雨の作は過渡期の驕きょう児うじの不遇の悶えとして存在の理由がある。緑雨の作の価値を秤しやうり量りやうする

にニーチエやトルストイを持出すは牛肉の香味を以て酢の物を論ずるようなものである。緑雨の通人的観察もまたしばしば人生の一角に触れているので、シミツ垂れな貧乏臭いプロの論客が鼻を衝く今日緑雨のような小唄で人生を論ずるものも一人ぐらいはあつてもイイような気がする。が、こう世の中が世^{せち}智^が辛^らくなつては緑雨のような人物はモウ出まいと思うと何となく落^{らく}莫^{ぼく}の感がある。

(大正十四年三月一日補訂)

青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷

底本の親本：「思ひ出す人々」春秋社

1925（大正14）年6月初版発行

初出：「現代」

1913（大正2）年4月号

※初出時の表題は「緑雨の十周年」です。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2011年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

齋藤緑雨

内田魯庵

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>